校訓	自分を育て 自分を生かし 社会を明るく	令和2年度　学校だより	発行日	令和3年2月9日
教育目標	夢と誇りのある生徒の育成 ～自分の意志・判断で自ら責任をもち行動する態度を育てる～	「天の子」 第19号	発行者	伊丹市立天王寺川中学校 校長　前田 徳三

【入試制度の改革】

２月１０・１１日に私学入試、２月１６日に公立推薦・特色選抜入試、３月１２日に公立一般入試が行われます。先日、大学入試センター試験に代わる初めての大学共通テストが１月１６・１７日と３０・３１日に行われました。受験生には、試験時間中のマスク着用や手指の消毒、自席での昼食が求められ、会場の換気など感染症対策が徹底されました。高校入試においても、同様に感染症対策が十分に講じられます。

今回の大学入試は、昨年まで見られた正誤を判断する単純な問題は減り、知識量ではなく、大量の文章や図表で示されたデータを速く的確に読み取り、それに対応できるかどうかを問う問題でした。

例えば、英語では、発音・アクセントや文法、語彙を問う設問がなくなり、６つの大問すべてが読解形式となり、読解量が大幅に増加し、多面的に情報を処理する能力が求められていました。また、イラストやグラフ等を扱った問題が大幅に増えており、単に英語を聞き取ることができれば良い訳ではなく、目的に応じた思考力・判断力が問われていました。さらに、概要や要点を捉えて内容をまとめる力や、図や表の情報と組み合わせて総合的に判断する力が問われていました。

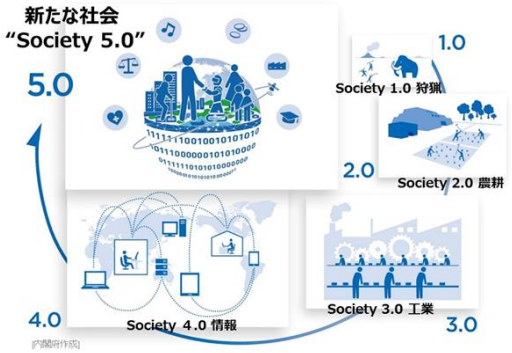
また、数学Ｉと数学ＩＡは、試験問題がセンター試験よりも10分長い70分となり、問題文の量が増加しており、計算量はやや減少し、これまで数値を答える形式が中心でしたが、解答群から適切な式や文章を選ばせる問題が大幅に増加しました。関数の性質やグラフの特徴を考察するものや、会話形式の出題もありました。

大学入試の出題形式が変わると数年後、高校入試も変わってきます。大学入試と同様に教科書で覚えた知識を活用して、資料を理解し、答えにたどり着く思考力を重視した試験に変わると思います。新学習指導要領を具現化したような内容です。普段の授業から、文章を読み込むことやグラフや図、表等の資料や情報から、自ら考える力を育んでまいります。頑張れ天中生！！

【Society5.0時代】

初の民間人校長として著名な藤原和博氏が「Society5.0 時代」に求められる教育ついて、わかりやすく説明されたので以下のとおり紹介します。『スマートフォンの急激な普及によって、世界５０億人の脳が直接つながるようになった。当然、人間に要求される能力も変化した。例えば、今までは「白色が基調の商品は何ですか」という問いに、できるだけ早く、たくさん答えることが求められた。しかし、これからは「白色を黒に変えたらヒットする商品は何ですか」という問いに答える能力が要求される。もちろん正解はない。正解のない問題に対し、情報を編集して「納得解」を作り出す能力が必要である。』

現在の中学生は間違いなく「Society5.0」※を生き抜かなければなりません。そのため、これからの社会は、既存の知識を身につけるだけでなく、初めてあった問題や正解のないような問題について、他者と協議しながら問題解決を図り、その時点での最適解を導く力が必要であります。



天の子１５号で、アメリカの一部の大学入試において、知識の暗記ではなく、クリティカルシンキング（物事の本質を捉える考え方）を重視しているとお伝えしました。しかし、知識量を軽視しているのではありません。多くの知識があればあるほど、また、広く深いほど正しく考えることができます。基礎知識を確実に身に付けているということが大前提です。逆に、考える力がなければ、知識は宝の持ち腐れになります。知識と学力は表裏一体で、正しく考える力は、豊かな知識があってこそ生まれます。学力とは考える力であると思います。

※ Society5.0 とは、内閣府によれば、Society1.0 が狩猟（しゅりょう）社会、Society2.0 が農耕社会、Society3.0 が工業社会、Society4.0 が情報社会、そして、今後「サイバー空間（仮想空間）とフィジカル空間（現実空間）」を高度に融合させたシステムにより、経済発展と社会的課題の解決を両立する人間中心の社会 Society5.0 の時代になる。我が国が目指すべき未来社会の姿として初めて提唱されました。

【新型コロナウイルス感染症に関する調査結果】

兵庫県教育委員会は、臨時休校中の新型コロナウイルス感染症が生徒に与える影響を検証し、今後の教育活動に生かす目的で調査されました。伊丹市でも２校が抽出され、本校は調査に協力しました。その結果、昨年度のコロナ禍でない３年生の結果と今年度の調査結果とを比べました。そこで、「毎日、同じくらいの時刻に起きている」が 77.6%（昨年度 15.1 ポイント減）、「毎日、朝食を食べていた」が 85.8%（昨年度 6.9 ポイント減）、「毎日、同じくらいの時刻に寝ていた」が 69.1%（昨年度 7.2 ポイント減）と、軒並み減少していることが分かりました。

また、家庭において、インターネット上の学習動画や学習ソフト、学習アプリで学習した生徒が 32.3%いました。そのことから、今後、インターネット上の学習コンテンツの充実や有効活用の必要があることも分かりました。

さらに、生活状況と学力の相関関係において、正答率の高かった生徒は、臨時休業中の午前中に勉強以外に「読書していた」や「勉強が楽しい」「宿題以外に家庭学習した」の割合が高く、正答率が低かった生徒は毎日、朝食を「あまり食べなかった」「まったく食べなかった」の割合が高いという結果が出ました。

加えて、家庭での計画的な学習、家庭での学習内容、現在の学習への意識の項目で、教科に関する調査結果と強い相関が見られました。その他、相関関係が見られる内容は、基本的な生活習慣に関すること、学校や友だちへの意識、親や先生への感謝の念など多岐にわたっていました。引き続き、継続的・計画的な学習習慣を確立する指導や知・徳・体の調和のとれた教育を推進してまいります。